NJ素流協News
平成22年７月31日
第67号

平成22年７月31日発行・発行所　ノースジャパン素材流通協同組合　〒020-0024 盛岡市菜園１丁目3-6（農林会館９階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html

平成二十二年度　第一回国産材利用拡大推進需給協議会を開催

今年度の第一回協議会が、七月二日、盛岡市の農林会館会議室において開催された。今年度からＮＪ素流協理事となった青森県国生協　坪理事長が委員に加わったほか、オブザーバーとして東北森林管理局からも毎回出席頂くこととなった。

今年は役員改選の年に当たるため、開会に先立ち事務局が会長以下三名の役員の再任を諮ったところ、満場一致で承認された。開会にあたり下山協議会長は「これまで中身の濃い議論をしてきた協議会であるが、今年度も北日本地域の林業振興のため実のあるものにしたいと考えている」と挨拶した。主な報告・協議事項は次の通り。

一、平成二十一年度事業・収支報告及び平成二十二年度計画

昨年度は協議会を四回開催、市況や生産現場の動向等を報告、意見交換を行った。運営費は合板工場と素流協からの負担金計一二三万円で賄われ、会計監査の結果、業務・会計は適切に処理されていると監事から報告があった。

新年度は四回の協議会のほか、工場・生産地見学等も計画に含め、一一五万円の予算を計上している。

二、原木等の需給動向の現状と今後の見通し

ア、素流協の出荷実績と見通し

合板工場への昨年度の出荷実績は、ホクヨープライウッド一三万㎥、北日本プライウッド七万四千㎥、合計二〇万四千㎥で、合板用素材の計画出荷量一六万六千㎥に対し、一二三％の達成率となった。

今年度は、六月の工場発注量がそれまでの三割増となったこと、例年この時期は組合員が国有林の生産請負に入り手山を伐っていないことから、現在納入率が九〇％となっている。さらに悪天候や、針葉樹パルプが思うように納入できないことから積極的な伐採を控えているという声もある。七月の発注量は四割増となるので、組合員から状況を聞きながら、供給不足を起こさないよう努めていきたい。なお現在一番不足しているカラマツについては、工場と交渉の上、価格の一部値上げを受け入れて頂いている。

イ、合板工場等の需要動向と見通し

【ホクヨープライウッド報告】

今年五月の全国の合板生産量は二一万四千㎥で、昨年よりは若干上向いたペースとなっているが、能力的には三〇万㎥の生産能力があるので、まだ少ない状況である。

合板価格は一時一二㎜五〇〇円という「歴史的安値」を経験したが、三月以降は連続的に八〇〇円にまで戻している。今後は八五〇円を目指す。

ホクヨーＰでは材料の国産材比率が現在八五％となっている。在庫の状況を見ながら七割操業を続けているが、今後七月、八月は価格が乱れることも予想され、個々

の工場で生産調整をしていくことになるだろう。

【北日本プライウッド報告】

国産材比率は六〇～七〇％になっているが、そのうちカラマツが主体になっている理由は、スギは二四、二八㎜等の厚物以外ではＪＡＳ規格の強度が取れないためである。客先も強度のあるカラマツ製品を要望してくる。素材発注量については当分このままお願いすることになろう。

現在国産材のフロア台板、コンパネ生産に取り組んでおり、フロアメーカーとは、強度や収縮率に関し五割方折り合えるようになってきた。秋口までにグループをあげて一三〇万坪、二六〇万枚の生産にかかることとしている。

ウ、素材生産業者の生産動向と見通し

◎岩手県森連の中で素材生産の多い六組合からの報告では、梅雨時で木材市況は弱含み、素材生産も控え気味となっている。下刈り・保育作業で手一杯で、国有林生産のため民有林を休んでいるところもある。

◎青森県整備協組合員は岩手と同じく、国有林請負に年内一杯従事する人が多い。今年から流通支援事業の運賃補助金が出るので、出材は若干増えるかもしれない。

◎青森県国生協では三社程が生産に従事している。量はそれなりに確保してきたが、パルプ材は需要がなく三〇％程度山に放置している状況で、資金繰りに苦労する。

他の生産者も国有林請負に従事しているとの報告が目立った。

三、東北森林管理局からの情報

今回は森林整備部　奥劔屋販売課長が出席され、国有林の動向について以下の通り説明された。

管内の素材販売量の推移は表1の通り。うち二十一年度のスギ二m材の販売量は二三万六千㎥、カラマツ二m材は三万六千㎥であった。製材業者からは「四mは出ないのか」との声があるが、現状では効率を優先すれば仕方ないと考えている。同年度の岩手県内の販売量は計八万㎥で、青森県、秋田県に比べると少ないが、間伐できる山は十分あると考えており、今後もっと伸ばす方向で考えている。

二十二年度の管内販売計画量は間伐主体で計六二万九千㎥、うち二三万㎥がシステム販売、残りは山元販売委託となる。多くの署がスギの手入れに重点を置いているが、カラマツの需要が多いことから積極的に増産すべきと考えている。広葉樹パルプ材も増産したい。

生産量は表2の通り。低質材の売り先が今後課題となるが、火力発電での石炭との混焼が始まれば、状況は劇的に変わるだろう。混焼比率を三％とすれば、一五万トン、三〇万㎥の需要が見込まれる。

林野庁側では生産、販売ともコスト削減を求めている一方、間伐推進の方針は変わらないとしている。単価を下げれば業者がついてこられなくなる。どのようにコスト削減するか検討が必要である。

今後増産を図る上では、請負生産の発注も早めに行うようにしたい。生産事業体の皆さんからも地元管理署に働きかけをして頂きたい。また工場では資材が足りないという声があり、システム販売量の増も可能性として考えたい。

表1　各年度別素材販売量推移（単位：千㎥）

	スギ	カラマツ	低質材	合計
19年度	281	39	38	385
20年度	307	44	58	433
21年度	361	53	126	561
22年度計画				629

表2　各年度別生産量推移（単位：千㎥）

	一般材	低質材	低質材率	合計
20年度	399	66	14%	465
21年度	395	141	26%	536
22年度計画			30%	580

一葉　樹木の病害虫（4）

マイマイガ（類）

平成十九年から二十年の夏、岩手県北から葛巻、盛岡地域で、市街地の街灯や照明に蛾の大群が押し寄せた。特にショッピングセンターやコンビニ、パチンコ店などでは、明かりの周りを乱舞し、地面に落ちた成虫の死骸に加えて、壁や電柱に大量に生みつけられた卵塊に、パニック状態になった。

さらに、翌年の春には、卵から孵った小さい毛虫が壁を這いまわり、さらに風に乗って付近に散らばって洗濯物に付着したり、皮膚炎をおこすなどの被害が発生した。盛岡市では、蛾の発生時期が「さんさ踊り」と重なることから、予防対策に追われた。

発生した蛾の種類は、マスコミなどではマイマイガと書かれているが、実はその近縁種であるカシワマイマイがかなり混じっており、地域によってはむしろカシワマイマイの方が多かったようである。

マイマイガ、カシワマイマイ共に、ハンノキ、ナラ、カシワ、クリなど広葉樹の害虫として知られていた。このうちマイマイガは戦後カラマツの造林が行われるようになってからはカラマツの害虫として有名になってしまった。岩手県内では、昭和三十年頃から五十年にかけて、旧衣川村や岩手町でほぼ一〇年間隔で大規模に発生した記録があるが、今回は久しぶりの発生である。

被害は、葉が食べられて全山黄褐色になるが、多くの場合幼虫に発生する流行病によって大発生の翌年には消滅し、同じ林で三年連続することはない。この被害でカラマツが枯れることはなく、成長量は一時減少するが二、三年で完全に回復する。

今や、マイマイガは、林業害虫と言うよりは、住宅地への飛来による不快、あるいは孵化幼虫による湿疹など衛生害虫として重要になったと言える。

カシワマイマイは、広葉樹のみを食べ、カラマツは食害しない。過去に県内の大発生の記録はない。

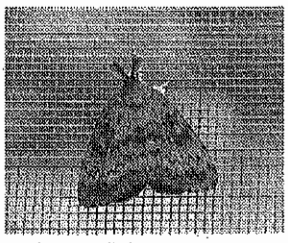
写真１　成虫♂
羽の長さ2.5cm位

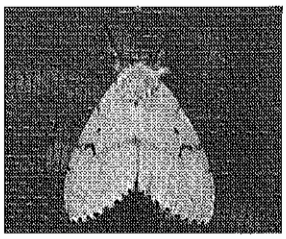
写真２　成虫♀
羽の長さ3.0cm位

写真６　丸坊主になったカラマツ林（８月）
秋までにはかなりの葉が再生し、枯れない

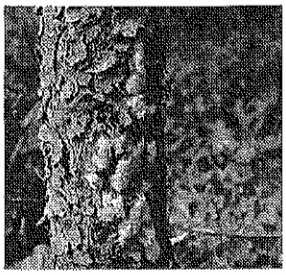
写真３　卵 塊
この状態で越冬する

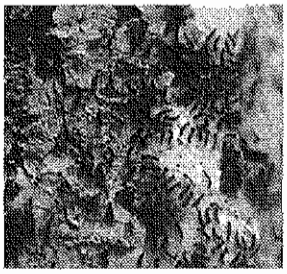
写真４　孵化幼虫
風に乗って分散する

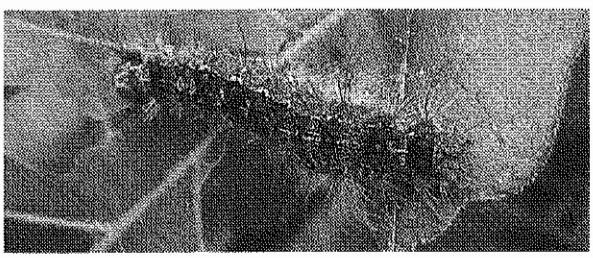
写真５　幼 虫　100種類以上の植物を食べる

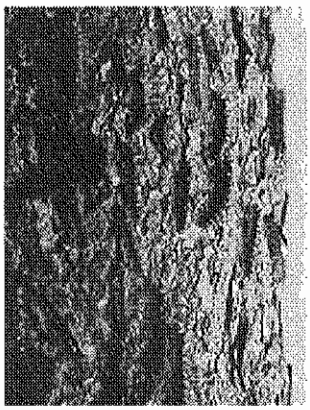
写真７　病気で死んだ幼虫(1)

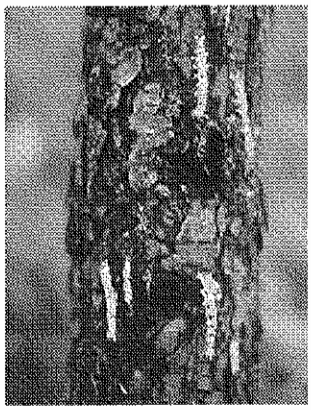
写真８　病気で死んだ幼虫(2)

丸太に組合員番号を記入してください

先に書面にてお願いしておりますが、工場に丸太を納入する際には、出荷者を明確にするため次のことを実施してください。

①丸太の木口三本以上に「N－○○○」（「N」と「組合員番号」）を記入する。

②椪積みの中央付近右端・左端（高さ不問）の丸太に一本ずつ記入する。

③元口に木材チョークで記入する。（末口では径級表示と重なる）

皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

作業道散策 4

フクロウって何て鳴く

フクロウの仲間は、世界各地に生息し、古くから人間と深いかかわりを持っており、森の哲学者、知恵、芸術、信頼のシンボルとなっており、不苦労（ふくろう）に因んで、様々なグッズのモチーフにもなっている。

一方、夜中に音もなく飛び回ってネズミを丸呑みにする獰猛な鳥で、悪魔の使者として扱われることもある。

写真１　近くで見張りをする親鳥

大木の樹洞に巣を作るが、最近適当な木が無いため、人工の巣箱もよく利用する。写真は、いずれも岩手県滝沢森林公園で撮影したものである。

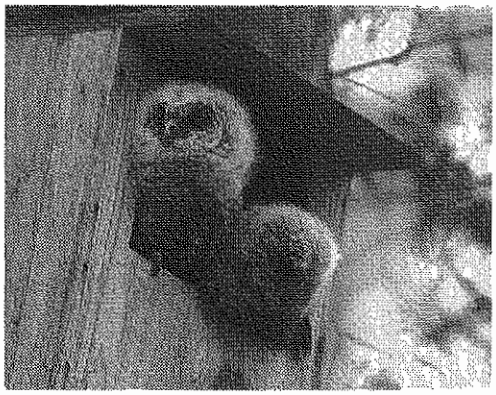

写真２　親鳥を待つ雛たち

日本の代表種フクロウは、独特の低音で、ホーホー・ゴロスケホーホーと鳴くが、地方によって「五郎助奉公」「ボロ着て奉公」「糊付け干せー」「デレスケほーほー」など多くの聞きなしがある。

皆さんの地方では、フクロウの鳴き方をどのように表現されているでしょうか。

岩手県内で「どぶろく」をオッホと呼んでいる地方があると聞いた。どうやら、密造酒の取り締まりに役人が来たことを、フクロウの鳴き声で村人に知らせた事によるらしいが、定かではない。

フクロウにまつわる昔話や言い伝えなどありましたら是非教えてください。この欄でご紹介させていただきたいと思います。

写真３　巣立ち間もない幼鳥

冗談欄　伝統技術の継承

真夏の風物詩といえば花火大会である。夜空にパーッと咲いて、シューと消えるところが日本人の心に響くものらしい。近頃は、真っ赤な火花を飛ばしながら、最後ははかなく燃え尽きる線香花火にひそかな人気が寄せられている。

線香花火はその形から名付けられたものと思っていたら、香炉に線香のように立てて遊んだことからとされる。線香花火の魅力を最大限に引き出すには、指でつまんで垂直にぶら下げるのではなく、地面に四十五度くらい傾けるのが秘訣なそうである。

ところで、「線香代」という言葉には、仏壇で焚く線香の代金のほかに、芸妓代という意味も有る。芸妓と遊ぶ時間を線香を焚いて計ったことから言われたもので、今は使われない言葉である。「芸妓」という言葉も使われなくなったが、今年春に盛岡芸者に若い女性が見習いとして採用され話題になった。また、北限の海女として有名な久慈市小袖では高卒の若い女性が海女の仲間入りをし、観光の目玉となっている。

林業界にも多くの女性が入って働いている。なのに話題にはならない。伝統技術の継承や若い女性ではないからだろうか。林業の伝統技術である木材の「筏下り」や「ぶり縄」を使う枝打ちは、今はやられていない。高性能林業機械をオバチャンが軽やかに操作しても誰も振向いてくれないのである。

平成22年７月分の販売実績

1　合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約1,150㎥増加、カラマツが約710㎥減少、アカマツが約990㎥増加し、全体では約1,510㎥増加している。昨年同月と比較すると、スギが約2,790㎥増加、カラマツが約1,150㎥増加、アカマツは約1,820㎥増加し、全体では約5,840㎥増加している。工場別では、ホクヨープライウッドが前月比較で約650㎥増加、昨年同月比較では約1,300㎥増加、北日本プライウッドは前月比較では140㎥増加、昨年同月比較では約3,240㎥増加となっている。これら増減の主原因は、工場側の受入調整によると考えられる。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約310㎥増加している。

2　その他（合板用以外）の出荷量は前月より約1,120㎥減少、昨年同月より約1,170㎥増加している。

3　今年度の年間計画量に対する４か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を33.3％とすると、今月の合板用出荷及び全体出荷実績は、計画数量を4.1～4.6ポイント上回る進捗状況となっている。

（㎥）

樹種	長級(m)	販売先 合板用 ホクヨープライウッド㈱	北日本プライウッド㈱	その他	小計	その他	計	今年度累計 合板用	樹種別割合(%)	その他	計
スギ	2.0	3,308	2,705	861	6,874			27,031			
	4.0	2,617	2,381	20	5,017			13,822			
	計	5,925	5,086	880	(363) 11,891	1,340	13,230	(1,817) 40,854	49.0	8,804	49,657
カラマツ	2.0	3,378	1,734	331	5,443			24,211			
	4.0	1,975	1,169	23	3,167			11,599			
	計	5,353	2,903	355	(21) 8,610	202	8,812	(928) 35,809	43.0	1,169	36,978
アカマツ	2.0	1,707	353	66	2,126			5,771			
	4.0	224	71		295			833			
	計	1,932	424	66	2,421	0	2,421	0 6,604	7.9	0	6,604
その他針		34			(34) 34	16	50	(34) 34	0.0	95	129
広葉樹		41			41		41	50	0.1	113	162
合計		13,284	8,412	1,301	(418) 22,997	1,557	24,554	(2,779) 83,350	100.0	10,180	93,530
目標達成率(%)								37.9		33.9	37.4
計画量								220,000		30,000	250,000

長級2.0には2.1を含む、（　）はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

先月号のこの欄において、「正義、法律、規則、習慣、礼儀、道徳等々の各種規範をまとめて〈倫理〉という言葉で一括りされている。そして、この倫理といわれるものは、風土性、地域性等の影響を受けつつ長い歴史の中で生み出されてきたものであるから、人びとの住む地方・地域・国によって異なっているのが普通である。ところが近年、この〈倫理〉といわれるものが世界的に普遍化(同一化)していく傾向がある」というところまで述べた。

それではどうして、世界の各地域や国において必ずしも同一ではなかった「倫理観」が、現代に至って世界的に普遍化・同一化する傾向を示すようになったのであろうか。それは、“世界は一つ”というスローガンにも見られるように、全世界を席巻しているグローバリズム思想の拡散・深化が原因であろう。具体的に言うと、世界中に科学技術の発展と合理主義の浸透・普遍化が進んだことに因(よ)るのである。現代に住む私たちは、科学技術の進歩の速さのすごさを実感しているが、その根底には、合理主義があるのである。合理主義とは、世界中のあらゆるものは混沌としているのではなく、すべてのものが何らかの合理性に基づいた法則によって秩序付けられているという考えである。そうすると、ここで言う「世界中のあらゆるものは混沌としている」と見えるもののある部分は、世界各地における風土性や歴史性に基づく特有の倫理観を指していると考えることもできる。そして従来の「倫理」といわれる世の規範の成立に深く関係する風土性・歴史性は、神話や宗教、さらには神秘性をも含んでいるのである。ところが自然は、もはや我われにとって畏敬の対象ではなく、人間自身の目的に従って操作されるものになり、そして人間はますます自然を支配する技術の発展を促進するのである。人間を含む自然界では、合理主義に基づく科学技術万能を信ずる人間が主体となるとともに、ますます自然は分析され、数量化され、因果関係で説明されるようになるのである。

とりわけ近年、「倫理の喪失」とか「倫理観の欠如」とよく言われるが、これまで述べてきたことを思い起こせば、このような変化は当然の帰結といえよう。

それは、これまでの「倫理観」が風土性・歴史性に基づくものでその底流には神話や宗教、神秘性が内包している極めて精神性の強いものに対する、現代の科学技術の発展を限りなく追及しようとする合理性(物質主義)のぶつかり合いであり、科学技術万能主義の圧倒的な優勢さの結果なのである。このような世界の現状において、一般論的に言えば、人間の認識は、自然を支配しうる技術の発展を促し、より一層人間の力を伸長させようとする野望を隠さないであろう。人間にとって「倫理」は必要ないのか？　人間は新たな倫理(規範)を創出できるのか。

（次号に続く）